

報告（1）

実態に応じたチーム担任制（チーム体制づくり）の導入について

1 現状と課題

現在の学校教育では、1人の教員が学級を担当する「固定担任制」により、児童生徒との信頼関係の構築やきめ細かな指導が行われている。一方で、不登校児童生徒の増加、特別支援教育のニーズ拡大、いじめの複雑化など、学校課題は高度化・多様化している。

こうした中で、担任一人に依存する体制により、以下の課題が生じている。

- ・ 指導や対応の遅れ
- ・ 学級経営のブラックボックス化
- ・ 教員の心理的・業務的負担の増大

(1) 新規採用教員の状況

令和7年度の新規採用教員53名中、休職者は4名、欠勤日数増加者2名と深刻な状況が見られた。特に複数学級の学校において、以下の課題が顕在化している。

- ・ 他学級との比較による心理的負担
- ・ 学級経営の困難（規律不全、授業停滞等）
- ・ 生徒指導機能の低下

本来期待される「学年内の支え合い」が十分機能していない実態がある。

(2) 学級経営の困難事例

休職には至らないものの、以下のような事例が複数確認されている。

- ・ 初期対応の遅れ（経験不足）
- ・ 規律形成の遅延
- ・ 強い指導の反復による関係悪化
- ・ 学級の閉鎖性によるSOSの見落とし

一度崩れた学級の立て直しには多大な労力を要するため、初期段階での組織的関与が不可欠である。

2 チーム担任制の目的

担任が一人で抱え込む構造を改善し、教員が安心して専門性を発揮できる環境づくりを目指す。

- ・ 担任業務の分散
- ・ 学年チームによる協働体制の構築
- ・ 学校全体の教育力向上

3 チーム担任制の効果と課題

チーム担任制は、複数教員が協働して学級運営を行う仕組みであり、「孤立」や「学級経営のブラックボックス化」の解消を図るものである。

(1) 全国の先行導入校の効果と課題

対象	主な効果	主な課題
子ども	・ 相談相手の選択肢増加 ・ 授業の質向上 ・ 自立心の育成	・ 指導者変更による不安
保護者	・ 複数教員による見守りへの安心感	・ 連携不足による混乱
教職員	・ 負担軽減 ・ 若手育成 ・ 心理的安心感の向上	・ 情報共有 ・ 責任分担の難しさ

(2) 導入による主なメリット

- ① 多角的な児童理解 → 複数の視点による変化や課題の早期把握
- ② 教員の心理的安全性の向上 → 孤立防止・負担軽減
- ③ 指導の質の平準化 → 学年全体での教育力向上

(3) 導入時の留意点

- ・ 責任の所在の明確化
- ・ 情報共有体制の整備（学年会・ICT活用）
- ・ 児童・保護者の安心感確保（主担当の設定）

4 本市における導入の方向性

一律導入ではなく、学校規模や実態に応じた柔軟な運用とする。

- ・ 学年・教科単位での試行
- ・ 教員構成・経験年数を考慮
- ・ 実践に基づく継続的改善

(1) 想定される運用形態

- ① ローテーション担任 → 担任を一定期間で交代し、全教員で全児童を把握
- ② 教科担任制 → 専門性の活用と教材研究の効率化
- ③ 事務・評価の共通化 → 指導の質の平準化と業務効率化

(2) 役割分担（例）

担 当	役 割
主担当	学籍管理、通知表総括、儀式的業務
教科担当	授業・評価・教材研究
当該日の担当	朝の会・帰りの会、初期対応
全教員	相談対応・継続的生徒指導

※実態に応じて柔軟に設定

(3) 本市の取組状況（令和7年度）

- ・ ローテーション道德に取り組む学校が多い。
 - ・ 一部の学校では、交換授業・教科担任制を実施した。
 - ・ 担任業務の完全ローテーションは限定的である。
- 固定担任制の有効性を維持するとともに、チーム担任制の部分的導入を進めている。

5 まとめ

チーム担任制は単なる業務分担ではなく、以下を実現する仕組みである。

- ・ 教員同士の協働による児童育成
- ・ 教員自身の成長
- ・ 持続可能な学校運営

今後は各校の実態に応じた実践と検証を重ねながら、段階的な導入を進める。